

瞬間動詞「知る」の振舞

大浦 真

1 はじめに

本論では、日本語の「知らない」と「知っていない」の使い分けについて扱う。
良く知られているように、日本語の「知っている」の否定は、通常、「知っていない」ではなく「知らない」という形式が用いられる。(以下の例文は、久野・増永 (1983, p.109) より引用。)

(1) A: 君、ドイツ語、知っているかい。

B: a. いや、知らない。

b.*いや、知っていない。

(2) $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない} \\ \text{b. *知っていない} \end{array} \right\}$ 人からの推薦状は余り信用できない。

実際、日本語教育の場合でも「知っている」の否定は「知らない」であるとされているようである。

「しっています」を否定にすると「しりません」となります。過去のことから「しりませんでした」となります。つまり「しる」は「シテイル/シナイ」というくみあわせになっているわけです。(砂川 (1986, p.31) より引用。太字は引用元のまま。)

しかし、「知っていない」という形式が決して使われないというわけではない。
(久野・増永 (1983, p.109))

(3) 田中は、アメリカ歴代大統領の名前をただ一人として $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない。} \\ \text{b. 知っていない。} \end{array} \right.$

実際、(3) では、(1) や (2) に比べると、自然に「知っていない」が使われるだろう。

本論では、「瞬間動詞」と呼ばれる動詞の振舞を考察し、その中で「知る」という動詞がどのように位置付けられるか述べる。その上で、「知っていない」という形式が決して使われないというわけではないという前提の元で、この「知っていない」という形式が(1)や(2)の例のように、どのような場合に使えなくなるのかという点に関して考察することを目的とする。その際、理論的枠組としては、日本語の動詞の分類と動詞の意味の形式化を行っている Igarashi and Gunji (1998) を元にする。

なお、本論では、益岡・田窪 (1992) にしたがって、「読む」・「書く」などの形式を「基本形」、「読んだ」・「書いた」などの形式を「タ形」と呼ぶ。さらに、「読んでいる」、「書いている」などの「～ている」が付いた形を「テイル形」と呼ぶことにする。

1.1 本論の構成

以下、本論では、第2節で、先行研究として「知らない」と「知っていない」の使い分けに関して述べている久野・増永 (1983) を概観し、第3節で、Igarashi and Gunji (1998) に基づき動詞の語彙構造とその分類に関して概説する。さらに、第4節で、瞬間動詞とされる動詞をさらに分析し、「瞬間動詞の継続化」という概念を導入する。最後に、第5節で瞬間動詞としての「知る」の振舞を分析する。

2 先行研究

本節では、先行研究として、久野・増永 (1983) における「知らない」と「知っていない」の使い分けに関する記述を概観する。

久野・増永 (1983) では、「知っていない」が使われる条件を統語的^{*1}な要因と意味的な要因とに分けて述べている。久野・増永 (1983) では、以下のようにまとめられている。(p.116)

(4) 統語的要因

- a. 「知っている」と並置され、肯定・否定の対照を表す時には、「知っていない」が用いられる。
- b. 活用変化語尾「…ければ」が付加された場合、「知っていない」パターンが義務的に用いられる。「知らなければ」は「知るようにならなければ」の意味しかない。

^{*1} 久野・増永 (1983) では、「統語的」ではなく「構文法的」という語を使用している。

- c. 活用変化語尾「…くては」、「…くても」が付加される場合には、「知らない」と「知っていない」両パターンが用いられ得る。推量形「…だろう」も同様である。
- d. 「知っている」の否定形が、肯定の推量を表す場合には、「知っていない」パターンも用いられ得る。

(5) 意味的要因

- a. 「知っていない」は、動作・完了性に着目した表現であり、「知らない」は、静的状態に着目した表現である。
- b. 従って、「…を知った」という表現が困難であればある程、「知っていない」を用いることが困難である。
- c. 「知っていない」は、それが表す状態が非恒常的であることを示唆する。
- d. 「知らない」は、知識の欠如を、その主体(主語)の内側から見て記述した表現であり、「知っていない」は、知識の欠如を、外側から客観的に観察して記述した表現である。

本論では、「知る」の意味的な振舞に着目するので、上記の統語的要因については触れない*2。

以下、2.1 節で意味的要因について概説する。

*2 統語的要因として挙げられている例を一例だけ挙げると、例えば、(4a)の例として上げられているのは、

- (i) ドイツ語を知っているでも $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らなくても} \\ \text{b. 知っていないでも} \end{array} \right\}$ 採用資格には関係ない。

という例であり、これは、肯定と否定が並置されていて、「知っている」との対照で、「知っていない」が使いやすくなっているとされている。久野・増永(1983)では、これに対して、

「知っていない」を「知らない」に変換する規則があり、「知っていない」の後に活用語尾か助詞が付いた場合、セグメンテーション(句切り)をどこに置くかによって、二つの異なった形式が派生するのではないか、と思われる。(p.111)

と述べている。つまり、

- (ii) a. 知って いなくても ⇒ 知っていないでも

- b. 知っていなくても ⇒ 知らなくても

ということである。しかし、二つの句切りがあるという根拠は示されていない。この点に関してはさらに考察の必要はあるだろう。

2.1 意味的要因

(5) で述べられているのは、意味的な要因である。

まず、(5a) と (5c) について述べるが、(5a) に関しては、例えば、

(6) このクラスの生徒達は、英語進行形の用法はまだ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない} \\ \text{b. 知っていない} \end{array} \right\}$ と思います。

という例文を挙げ (p.112)、「知っていない」の方には、完了の意味が含まれているものと感じられるとしている。

また、(5c) に関しては、

(7) 田中は、今の所、まだこの秘密を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない。} \\ \text{b. 知っていない。} \end{array} \right.$

という例文を挙げ (p.114)、「知っていない」が非恒常性を示唆している、つまり、「知っていない」は間もなく「知っている」という状態に移行するだろうということを示唆している、と指摘している。

しかし、それは確かにそうだが、テイル形には

(8) a. その記事は、既に読んでいる。

b. 先生にはまだ相談していない。(益岡・田窪, 1992, p.115)

という例文のように、もともと完了状態を表す用法があり、(8b) のように否定形になると、動きが完了していないことだけではなく、近いうちにその動きが行われることを暗に示すようになる。したがって、「知っていない」という形式は決して使えないという事実がない限り、(6) の「知っていない」に完了の意味が含まれているということは当然のことであろう。よって、(5a) と (5c) は、単に、動詞の基本形の否定とテイル形の否定との間の一般的な傾向を述べたに過ぎないと言えるだろう。

また、(5b) に関しては、以下のような例文を挙げている (pp.112-3)。

(9) a. 山田は日本語を知っている。

b.*山田はその時初めて日本語を知った。

c.*山田は日本語を知っていない。

(10) a. 山田はこの事件の真相を知っている。

- b. 山田はその時初めてこの事件の真相を知った。
- c. 山田はこの事件の真相をまだ知らない。

久野・増永 (1983) では、「知った」という形式が使いにくい場合は、「知らない」という形式も使いにくいとしている。観察的な事実としては確かにそうであろう。論者自身の文法性の判断も久野・増永 (1983) のものと一致している。しかし、久野・増永 (1983) では、この「知った」の文法性と「知らない」の文法性がなぜ関連しているのかは、明確には指摘していない。そこでは、「鼻がとがっている」、「青い目をしている」などの「単純状態」*³の動詞との類似性を示唆しているが、

- (11) a. 鼻が尖っている。
- b.*鼻が尖った。
- c. 鼻が尖っていない。

というように、(9) の分布とは異なり、単純状態の動詞では、テイル形の否定が普通に使えるので、一部類似しているとしてもこれらは別の現象であると考えべきであろう。

また、久野・増永 (1983) では、(5d) の要因も指摘している。これは、例えば、

- (12) 花子は、アメリカ歴代大統領の名前を一人も { a. 知らないそうだ。
- b. 知らないそうだ。

という例を挙げ、

- (a) 文は、花子が話し手に、「私、アメリカ歴代大統領の名前を一人も知らないわ」と話したことを示唆し、(b) 文は、誰か、花子をテストした人が、話し手にそのテスト結果を伝えたことを示唆している。(p.115)

と述べている。

以下、本論では、(9) のような「知らない」が使えない例に対して、なぜ、使えないのかを明らかにすることを目的として議論を進めていく。

3 日本語の動詞の語彙の構造と分類

本節では、本論における理論的枠組を導入する。この枠組は Igarashi and Gunji (1998) に基づいている。

*³ 「単純状態」とは金田一 (1950) のいう所の「第四種の動詞」に相当する (金田一 (1955))。第四種の動詞に関しては、*5 を参照。

まず、3.1 節では、動詞の語彙の構造を分析し、それに基づき、日本語の動詞の分類を提示する。さらに、3.2 節でテイル形の分析を概説する。

3.1 動詞の語彙の構造と分類

Igarashi and Gunji (1998) では、一つの動詞で複数のイベントを表すことがあると述べられている。例えば、「着る」という動詞を例にとると以下のようなになる。

- (13) a. ケンは今隣の部屋で着物を着ている。
- b. ケンは今朝からずっとあの着物を着ている。
- c. ケンはあの着物を三年前に着ている。(Igarashi and Gunji, 1998, p.82)

これらのテイル形の用法はそれぞれ、(13a) は「動きの継続の状態を表す用法」、(13b) は「動きの結果の状態を表す用法」、(13c) は「経験・経歴を表す用法」とされているものである(益岡・田窪, 1992)。以下、本論では、(13a) の用法を「進行中のテイル形」、(13b) の用法を「結果状態のテイル形」、(13c) の用法を「経験のテイル形」と呼ぶことにする。

「着る」という動詞は、英語にすると“put on”と“wear”という二つの部分に分かれていると考えられる。これら三つのテイル形が「着る」のどの部分を指しているか考えると

- (13a): 服を身に着けるという動作 (the act of putting on clothes)
- (13b): 服を身に着けているという状態 (the state of wearing clothes)
- (13c): 服を身に着けたという経験 (the experience of wearing clothes)

というそれぞれ違う部分を指していることが分かる。

したがって、「着る」という動詞の意味の中には、三つの重要な時点があると考えられる。つまり、「身に着けるという動作が始まる時点」、「その動作が終わり、身に着けているという状態が始まる時点」、「身に着けているという状態が終わり、服を脱ぎ、元の状態に戻る時点」という三つの時点である。

これらの三つの時点を考えて、(13a) は第一の時点と第二の時点の間の時間に、(13b) は第二の時点と第三の時点の間の時間に、(13c) は第三の時点よりも後の時間に、それぞれ関わっていると考えられる。

このような複数の時点は、通常の動詞なら必ず持っていると考えられる。ここで、上記の三つの時点を順に、開始時 (start time)、終了時 (finish time)、リセット時 (reset time) と呼ぶことにする。

したがって、動詞の語彙項目の中の素性として、

(14) $\langle s, f, r \rangle$ (ただし、 $s \leq f \leq r$)

という形式の“temp”という素性があると考える*4。それぞれ、 s は開始時、 f は終了時、 r はリセット時を表している。

ただし、全ての動詞が上記の三つの時点を持っているわけではない。例えば、「歩く」という動詞は、「着る」と異なっている。「着る」は終了時を過ぎても、リセット時まで「身に着けている」という状態は続くが、「歩く」の場合、「歩く」の終了時が来たら、同時に「歩いている」状態は終了する。この場合、「歩く」の終了時とリセット時は同時である、と考えられる。

また、「腐る」という動詞の場合、従来、この種の動詞は瞬間動詞と呼ばれていることから分かるように(金田一, 1950)*5、基本的には、開始時と終了時は同時であると考えられる。さらに、「腐っている」という状態は、一度始まったら、終了することは考えられないので、リセット時は well-defined ではない*6と考えられる。

以上の概念に基づき日本語の動詞を分類したのが以下の通りである (Igarashi and Gunji, 1998, pp.83-4)。

*4 ただし、この素性は proto-lexical item と呼ばれる項目の中にあると考える。これについては後述する。

*5 金田一 (1950) では、日本語の動詞を以下のように分類している。

第一種の動詞 状態を表す。「ている」をつけることがない。状態動詞と呼ぶ。ex. ある、できる

第二種の動詞 動作・作用を表す。動作・作用が、ある時間内続いて行われる。「ている」をつけることができ、その動作が進行中であることを表す。継続動詞。ex. 読む、書く、雨が降る、風が吹く

第三種の動詞 動作・作用を表すが、その動作・作用は瞬間に終わってしまう動作・作用である動詞である。「ている」をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す。瞬間動詞。ex. 人が死ぬ。電灯が点く。

第四種の動詞 ある状態を帯びることを表す動詞。いつも「ている」の形で状態を表すのに用いる。ex. 「山が聳えている」

*6 ‘well-defined’ というのは「明確に定義されている」という意味である。ただし、本論では、‘well-defined’ という言葉は、「well-defined ではない」という形でしか使わない。これは、「はっきり定まっていない」という意味で使われている。例えば、「腐る」のリセット時は、定める以前にそもそも存在していないので well-defined ではないと言える。また、「暗記する」のリセット時は、(暗記したものはいつかは忘れてしまうので) 存在はしていてもそれがいつかはっきりしていないので、well-defined ではないと言える。

- (15) a. **Recoverable transitional activity**: s, f, r が定義されていて、すべて異なっている。
 b. **Nonrecoverable transitional activity**: s, f が定義されていて、異なっている。 r は well-defined ではない。
 c. **Definite activity**: s, f が定義されていて、異なっている。 r は f と同一である。
 d. **Indefinite activity**: s が定義されていて、 f, r が well-defined ではない。
 e. **Recoverable transitional achievement**: s, f が定義されていて同一である。 r が定義されていて、 s, f とは異なっている。
 f. **Nonrecoverable transitional achievement**: s, f が定義されていて同一である。 r が well-defined ではない。
 g. **Definite achievement**: s, f, r が定義されていて、同一である。
 h. **Indefinite achievement**: s, f, r が well-defined ではない。

さらに、Igarashi and Gunji (1998) では、**view** という素性が導入される。

まず、**temp** という素性は、動詞が文の中で実際に表しているものよりも多くのものを表していると考えられる。

- (16) a. ケンは毎朝母親の手を借りずに服を着る。
 b. ケンは毎日三時間だけ赤い服を着る。
 c.*ケンは{ 今までに一度だけ/三年前に } あ服を着る。(Igarashi and Gunji, 1998, p.85)

これらの例は、形式的には、(13)のテイル形の各例を基本形に変更したものに対応する。それぞれの「着る」が **temp** の中でどの時間を指しているかということを考えると、(16a)は開始時から終了時の間の時間を指していて、(16b)は終了時からリセット時の間の時間を指していると考えられる。さらに、(16c)が非文となることから分かるように、テイル形とは異なり、基本形はリセット時よりも後の時間を指すことできない。また、(16a)と(16b)の意味の「着る」を同時に表すことはできないだろう。

したがって、**temp** という素性を持っている語彙項目 (lexical item) を原語彙項目 (proto-lexical item) として捉え、実際の語彙項目は、“**view**” という素性を持っていて、この素性の値は、原語彙項目の **temp** の値を元にして以下のように導入される。

basic view **view** $\langle s, f \rangle$

resultative view **view** $\langle sf, r \rangle$ (ただし、 $r > sf$)

(16a) の「着る」が basic view に対応し、(16b) の「着る」が resultative view に対応する。

ここで、 sf は開始時と終了時の時間が合わさったもので、resultative view では、二つの時点の間の時間は考慮されず、二つの時点は一つの時間のように考えられていることを表している。

また、resultative view の場合は、その結果はある程度の幅を持って継続するものであるので、 $r > sf$ という条件がついている。したがって、終了時とリセット時が同一である時に resultative view は存在しない。例えば、definite activity の場合は、終了時とリセット時が同一なので、basic view しか存在しない。

さらに、Igarashi and Gunji (1998) では、‘visibility’ という概念が定義されている。これは、「見えやすさ」を表す概念であり、開始時、終了時、リセット時にそれぞれ 0 から 3 までの数字が割当てられ、それがその時点の見やすさを表している。visibility 3 と 2 の時点が「定義されている」時点、visibility 1 と 0 の時点が「well-defined ではない」時点である。

また、resultative view になった時、 sf の visibility は s と f の visibility の小さい方を取ることにする。

Igarashi and Gunji (1998) では、この概念を利用して、「始まる」や「終わる」など、動詞の後に付加される動詞^{*7}の振舞を説明している。(例えば、「読み終わる」は言えるが、「黙り終わる」は言えないということなど。)ただ、その議論は本論の議論にはあまり関係しないので、詳細は省くことにする。本論では、「定義されている」、「well-defined ではない」という対立のみに着目する。ただ、nonrecoverable transitional achievement である動詞のリセット時は well-defined ではないが、その中で visibility が 1 であるものと 0 であるものがあるとされている。これは、4.1 節で再度触れるが、resultative view に「始める」を付加できるかどうかに関係している。リセット時の visibility が 1 である「腐る」は「腐り始める」が言えて、visibility が 0 である「死ぬ」は「死に始める」が言えない。

以上のことをまとめたのが、図 1 である。なお、図の中の a. から h. は、(15) のそれぞれに対応する。

3.2 テイル形の分析

本節では、引続き Igarashi and Gunji (1998) におけるテイル形の分析について概観する。

^{*7} Igarashi and Gunji (1998) では、‘View-Changing Verbal’ と呼ばれている。

動詞分類	例	Basic	Resultative
a. Recoverable transitional activity $\langle s^3, f^2, r^2 \rangle$	着る、開ける	$\langle s^3, f^2 \rangle$	$\langle sf^2, r^2 \rangle$
b. Nonrecoverable transitional activity $\langle s^3, f^2, r^0 \rangle$	暗記する	$\langle s^3, f^2 \rangle$	$\langle sf^2, r^0 \rangle$
c. Definite activity $\langle s^3, f^2, f^2 \rangle$	歩く、読む	$\langle s^3, f^2 \rangle$	なし
d. Indefinite activity $\langle s^3, f^1, f^1 \rangle$	待つ、黙る	$\langle s^3, f^1 \rangle$	なし
e. Recoverable transitional achievement $\langle s^3, s^2, r^2 \rangle$	座る、結婚する	$\langle s^3, s^2 \rangle$	$\langle s^2, r^2 \rangle$
f. Nonrecoverable transitional achievement $\langle s^3, s^2, r^1 \rangle / \langle s^3, s^2, r^0 \rangle$	腐る、死ぬ	$\langle s^3, s^2 \rangle$	$\langle s^2, r^1 \rangle / \langle s^2, r^0 \rangle$
g. Definite achievement $\langle s^3, s^2, s^2 \rangle$	驚く、つまづく	$\langle s^3, s^2 \rangle$	なし
h. Indefinite achievement $\langle s^0, s^0, r^0 \rangle$	似る、ただよう	$\langle s^0, s^0 \rangle$	$\langle s^0, r^0 \rangle$

図 1: 動詞の可能な view

Igarashi and Gunji (1998) では、「ている」という形式は、これは「て」と「い」と「る」の三つの形態素からなっていると考えられている。このうち、「る」は非過去を表す形態素だが、「て」には、継続、もしくは、経験の意味があり、「い」には、「状態の中にいる」という意味があるとしている。実際には、その原語彙項目を以下のように定義している。

(17) a. 「て」の原語彙項目

$$\left[\begin{array}{l} \text{verb} \\ \text{adjacent} \left[\begin{array}{l} \text{verb} \\ \text{view} \langle 1, 2 \rangle \end{array} \right] \\ \text{temp} \langle 3, 4, 5^0 \rangle \end{array} \right]$$

where $\boxed{1} < \boxed{2}, \boxed{1} \leq \boxed{3} \leq \boxed{4} \leq \boxed{2}$

b. 「い」の原語彙項目

$$\left[\begin{array}{l} \text{verb} \\ \\ \text{subcat} \left[\begin{array}{l} \text{verb} \\ \text{stem} \langle te \rangle \\ \text{view} \langle \boxed{1}, \boxed{2} \rangle \end{array} \right] \\ \text{temp} \langle \boxed{1}, \boxed{2}, \boxed{2} \rangle \end{array} \right]$$

where the interpretation is “to be in the state of”

これは、実質的には、「て」と「い」の原語彙項目を、それが付加される動詞の **view** を入力としてとり、**temp** を出力として持つような関数として捉えていることになっているので、(17) を関数的な表記に書き換えると以下のようなになる*8。

(18) a. 「て」

view $\langle \boxed{1}, \boxed{2} \rangle \rightarrow$ **temp** $\langle \boxed{3}, \boxed{4}, \boxed{5}^0 \rangle$

(ただし、 $\boxed{1} < \boxed{2}, \boxed{1} \leq \boxed{3} \leq \boxed{4} \leq \boxed{2}$)

b. 「い」

view $\langle \boxed{1}, \boxed{2} \rangle \rightarrow$ **temp** $\langle \boxed{1}, \boxed{2}, \boxed{2} \rangle$

(ただし、「～の状態にある」と解釈される。)

そして、「て」が付加された形式には、

(19) Basic view: $\langle \boxed{3}, \boxed{4} \rangle$

Resultative view: $\langle \boxed{3}, \boxed{4}, \boxed{5} \rangle$

という二つの **view** が存在し、「い」が付加された形式には、

(20) $\langle \boxed{1}, \boxed{2} \rangle$

という basic view しかないということになる。

これに基づきテイル形の意味を計算すると、(13) の三つの用法が説明できる。

(21) (= (13))

a. ケンは今隣の部屋で着物を着ている。

b. ケンは今朝からずっとあの着物を着ている。

*8 Igarashi and Gunji (1998) は HPSG の枠組に基づいているが、HPSG の枠組では、 $\boxed{1}, \boxed{2}, \dots$ のような ‘tag’ で変数を表すことが多いので本発表でもそれに従う。(Sag and Wasow, 1999)

c. ケンはあの着物を三年前に着ている。

まず、(13a) は、「着る」の basic view に「て」が付加され、それが basic view になったもの、(13b) は、「着る」の resultative view に「て」が付加され、それが basic view になったものであると、それぞれ説明される。つまり、「着る」の temp を $\langle s, f, r \rangle$ とすると、進行中のテイル形の **view** は s と f の間にあり、結果状態のテイル形の **view** は sf と r の間にある、ということである。

そして、(13c) だが、実は、この文には、二つの意味があり、一つは、「三年前に着用する動作を行った経験がある」という意味であり、もう一つは、「三年前に着用している状態にあった経験がある」という意味である。前者は、着用する動作に着目したもののなので、「着る」の basic view に「て」が付加され、それが resultative view になったものであり、後者は、着用している状態に着目したもののなので、「着る」の resultative view に「て」が付加され、それが resultative view になったものであるということになる。

4 「瞬間動詞」について

本節では、第3節で概説した Igarashi and Gunji (1998) に基づき、さらに瞬間動詞の振舞を観察する。

以下、4.1 節で瞬間動詞の下位分類について述べ、4.2 節で、新たに「瞬間動詞の継続化」という概念を導入する。

4.1 瞬間動詞の下位分類

3.1 節で述べた Igarashi and Gunji (1998) における動詞の分類において従来、金田一 (1950) などで「瞬間動詞」とされているものに対応するのは、

- Recoverable transitional achievement
- Nonrecoverable transitional achievement
- Definite achievement

の三つであると考えられる。

この分類は、直観的に説明すると、第一の recoverable transitional achievement は「リセット時があり、開始した状態はいつかは元に戻る。」、第二の nonrecoverable transitional achievement は「リセット時がなく、一度開始した状態は決して元に戻らない。」、第三の definite achievement は「リセット時は開始時 (=終了時) と同じ

であり、状態は開始と同時に元に戻る。」ということになる。

これを図示すると、以下のようになる。

それぞれ、図 2 は recoverable transitional achievement を、図 3 は nonrecoverable transitional achievement を図 4 は definite achievement を表している。それぞれの図の矢印は時間軸を表しており、その時間軸の上に、開始時 (s)、終了時 (f)、リセット時 (r) があることを表している。なお、図 2 は、矢印の右半分が点線になっているが、これはリセット時が well-defined ではないことを表している。



図 2: recoverable transitional achievement

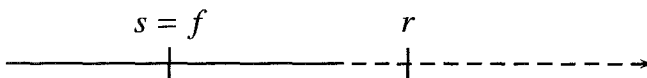


図 3: nonrecoverable transitional achievement



図 4: definite achievement

nonrecoverable transitional achievement はさらに、二つの分類に下位分類できる。それは、「始める」や「続ける」を動詞に付加することによって区別される。

まず、「始める」について説明する。

- (22) a. ケンは五分钟前に着物を着始めたが、まだ着ている。
b. ケンがあの服を着始めたのは三日前だ。(Igarashi and Gunji (1998, p.88))

Igarashi and Gunji (1998) では、それぞれ、(22a) には、‘Ken began putting on kimono five minutes ago, but he is still putting it on’ という英訳を、(22b) には、‘It has been three days since Ken began wearing those clothes.’ という英訳を付けている。「始める」は、それが付加された動詞の **view** の左側の時点を示すものであると考えられる。つまり、通常の解釈では、(22a) における「着る」は basic view であると考えられるので、これは、「着物を着るという動作を始めたのが五分钟前である」と解釈される。つまり、「五分钟前」が「着る」の開始時である。また、(22b) では、「着る」は resultative view であると考えられ、「あの服を着ているという状態が始まったのが三日前である」と解釈される。つまり、「三日前」が「着る」の終了時 (=開始時) である。

瞬間動詞について同じように考えると、まず、瞬間動詞の basic view は $\langle s, s \rangle$ と瞬間的になり、そもそも「始める」も後述する「続ける」も付加できないと考えられる。

したがって、resultative view で考えると、nonrecoverable transitional achievement の場合、「腐る」と「死ぬ」では振舞が異なっている*⁹。

- (23) a. この店が開き始めたのは三年前だ。
b. この缶詰が腐り始めたのは三年前だ。
c. *彼が死に始めたのは三年前だ。

というように、「腐る」は「開く」などの recoverable transitional achievement の動詞と同じように「始める」を付加することができるが、「死ぬ」はそうすることができない。

また、「続ける」に関しても、resultative view の動詞に付加されると考えると、

- (24) a. この店は開き続けてもう三年になる。
b. この缶詰は腐り続けてもう三年になる。
c. *彼は死に続けてもう三年になる。

⁹ 本論では、‘’ という印を「意味的に解釈できない」という意味で使用する。

となり、「始める」の場合と同じように、「腐る」と「死ぬ」とで異なった振舞をする^{*10}。

したがって、nonrecoverable transitional achievement の動詞は、「腐る」タイプの動詞と「死ぬ」タイプの動詞に下位分類できると考えられる。

Igarashi and Gunji (1998) では、この違いをリセット時の visibility の違いとして説明している。3.1 節で簡単に述べたように、「腐る」タイプのリセット時の visibility は 1 であり、「死ぬ」タイプのリセット時の visibility は 0 である。したがって、以下本論では、便宜上、「腐る」タイプの動詞を r^1 タイプ、「死ぬ」タイプの動詞を r^0 タイプと呼ぶことにする。さらに、この類推で、recoverable transitional achievement を r^2 タイプとも呼ぶ。

ただ、Igarashi and Gunji (1998) では触れられていないが、この「始める」「続ける」を付加するテストの際には、瞬間動詞の resultative view にこの二つの語を付加するように注意する必要がある。というのは、「始める」「続ける」は、開始時と終了時が同一ではない継続動詞にも付加され得るので、4.2 節で後述する「瞬間動詞の継続化」が起きるような場合には、本来付加できないのに付加できるように見ることがある。例えば、瞬間動詞とされる「忘れる」について考えてみると、

- (25) a. 彼が日本語を忘れ始めたのは三日前だ。
b. 彼は日本語を忘れ続けてもう三日になる。

となり、「忘れる」には「始める」「続ける」が付加できるように見える。しかし、これは、「忘れる」という瞬間動詞に付加されたのではなく、詳細は後述するが、継続動詞のように振舞っている「忘れる」に付加されたものであろう。つまり、(25a) も (25b) も、「三日前に日本語を忘れ始めて、今も徐々に忘れ続けている」という状況を指しており、瞬間動詞として「忘れた」時間から三日経ったということを指しているのではないと考えられる。

さらに、「三日」ではなく、もっと長い時間間隔で考えてみると、

- (26) a.*彼が日本語を忘れ始めたのは五十年前だ。
b.*彼は日本語を忘れ続けてもう五十年になる。

^{*10} ただし、「複数のイベント」を指す場合は、「死に始める」も「死に続ける」も使うことができる。

- (iii) a. 公害のため、人々がだんだん死に始めた。
b. 公害のため、人々が毎日死に続けた。

というように容認度が悪くなる。これは「日本語を五十年かけて徐々に忘れる」という状況が考えにくいので、必然的に「忘れる」は瞬間動詞として、解釈されることになり、「死ぬ」と同じ¹⁰タイプである「忘れる」は「始める」「続ける」を付加できなくなるのである。

4.2 瞬間動詞の継続化

従来から、動詞の分類を、継続動詞/瞬間動詞、もしくは、activity/achievement という枠組を基本にして、行われている研究は多い。ただ、その分類におさまらないと考えられることも多い。特に本節では、瞬間動詞とされる動詞が継続動詞のように振舞う例を提示する。

例えば、「開く」という動詞は、通常瞬間動詞として考えられるので、テイル形になった時、結果状態を表すテイル形になるが、文脈によっては、進行中の状態を表すテイル形になる。

- (27) a. そのドアが開いている。
b. 大きなドアが徐々に開いている。

(27a) は典型的な結果状態を表すテイル形であるが、(27b) は進行中の状態を表すものである。進行中のテイル形は開始時と終了時が等しくないような継続動詞から作られる。(27b) も「開く」の開始時と終了時は等しくないと感じられる。したがって、この「開く」はテイル形の用法という点に関していえば、継続動詞のように振舞っているようである。以下、本論では、(27b) のように瞬間動詞が文脈によって継続動詞のように振舞うことを「瞬間動詞の継続化」と呼ぶことにする。瞬間動詞の継続化は、主に、「徐々に」、「少しずつ」など程度の進行状況を表すような副詞が付加された時に起こりやすい。

つまり、「開始時 = 終了時」である瞬間動詞が「開始時 ≠ 終了時」になるのが瞬間動詞の継続化である。

ただし、どんな動詞でも瞬間動詞の継続化が起こるとは限らない。例えば、「開く」と同じ recoverable transitional achievement である「止まる」という動詞に関しては、

- (28)?大きな車が徐々に止まっている。

というように、継続化は起こりにくいと考えられる。

これは、recoverable transitional achievement に限らず起こる現象で、以下の例のように、nonrecoverable transitional achievement である「腐る」でも起こる。し

かし、同じ nonrecoverable transitional achievement である「死ぬ」では起こりにくい*¹¹。

- (29) a. そのバナナは少しずつ腐っている。
b.*彼は少しずつ死んでいる。

また、definite achievement に関しても同じように瞬間動詞の継続化は起こると考えられるが、definite achievement の場合、進行形のテイル形を作ることができる以外にもその動機付けがある。

definite achievement には経験のテイル形であると考えられる用法もある。

- (30) 彼は三年前も同じ場所であつまっている。

テイル形の規則をもう一度見てみると、「て」を付加する時に、入力となる動詞の view を $\langle 1, 2 \rangle$ とすると、 $1 < 2$ という条件が必要になる。この条件がないと、(継続化していない) 通常の瞬間動詞から進行中のテイル形を作ることができるようになってしまう。したがって、「て」を付加できないので、definite achievement はテイル形を作れないということになる。しかし、上述のように definite achievement でも経験のテイル形なら作ることができる。ここで、この場合は、一旦継続化が起きてから「て」が付加されたと考えると説明できる。これも、瞬間動詞の継続化が起きているという根拠の一つである。

4.3 本節のまとめ

4.1 節で見た r^1 タイプ (「腐る」) の動詞と r^0 タイプ (「死ぬ」) の動詞の分類と 4.2 節で見た瞬間動詞の継続化についてまとめると以下のようなになる。

● 瞬間動詞の分類

- recoverable transitional achievement (r^2 タイプ) — リセット時が定義されている。

ex. 座る、結婚する

*¹¹ この場合も、「複数回のイベント」を指す場合は、「徐々に」や「少しずつ」と共起することができる。

- (iv) a. その国の人々が徐々に死んでいる。
b. 多くの人々が少しずつ死んでいる。

- nonrecoverable transitional achievement(r^1 タイプ) —リセット時が well-defined ではない。「始める」や「続ける」を付けることができる。

ex. 腐る

- nonrecoverable transitional achievement(r^0 タイプ) —リセット時が well-defined ではない。「始める」や「続ける」を付けることができない。

ex. 死ぬ

- definite achievement

ex. 驚く、つまづく

- 継続性

- 瞬間動詞の継続化がある。 — テイル形になった時、進行中の動作を表すことができる。

ex. 開く、腐る

- 瞬間動詞の継続化がない。 — テイル形になった時、進行中の動作を表すことができない。

ex. 座る、結婚する、死ぬ

5 瞬間動詞「知る」の振舞

本節では、第4節で論じた瞬間動詞の分類を元に、5.1節で、瞬間動詞としての「知る」がどのように瞬間動詞の分類の中に位置付けられているか考察する。さらに、それに基づき、5.2節で「知る」の実際の振舞について説明を行う。

5.1 瞬間動詞としての「知る」の位置付け

以上の瞬間動詞の分類において、「知る」という動詞はどういう位置付けにあるのだろうか。2.1節で述べた例文を再掲する。

(31) (=9))

- a. 山田は日本語を知っている。
- b.*山田はその時初めて日本語を知った。
- c.*山田は日本語を知っていない。

(32) (=10))

- a. 山田はこの事件の真相を知っている。
- b. 山田はその時初めてこの事件の真相を知った。

c. 山田はこの事件の真相をまだ知っていない。

2.1 節において、(9) では、「知った」、及び、「知っていない」は使いにくい、(10) ではそれらが使えると述べた。確かに、(9) は「日本語を知る」を「日本語を習得する」、もしくは、「日本語をわかる」という意味で捉えれば、「知っている」は使えるが、「知った」「知っていない」は使えないであろう。

また、久野・増永 (1983) では、以下のような例も挙げている (p.113)。

(33)*あいつは $\left\{ \begin{array}{l} \text{花子} \\ \text{チェス} \\ \text{解析幾何学} \\ \text{自動車の運転} \end{array} \right\}$ を知っていない。

(34) あいつは $\left\{ \begin{array}{l} \text{時が金であるということを} \\ \text{代数の公式を一つも} \\ \text{交通規則を何も} \end{array} \right\}$ 知っていない。

これらの例でも、(33) の例は「知っていない」が使いにくく、(34) の例は「知っていない」が使いやすいとしている。久野・増永 (1983) では、(33) の例に対して、「簡単に伝達・習得できない種類の知識の習得が問題となっている。」と述べ、(34) の例に対して、「複雑さに相違はあるとしても、箇条書きにして伝達し得る種類の知識の習得が問題となっている。」と述べている。

確かに、非文としている (9) や (33) の「日本語を知る」ことや「自動車の運転を知る」ことなどは、「簡単に伝達・習得できない種類の知識」であり、それゆえに、短時間ではできないことである。それに対して、「事件の真相を知る」ことや「代数の公式を知る」ことなどは、「箇条書きにして伝達し得る種類の知識」であり、個々の事件や個々の代数の公式を「知る」ことは比較的時間のかからないことである。つまり、「知る」は目的語が何であるかによって、振舞が異なっているようである。前者の場合、「知っていない」は使いにくく、後者の場合、「知っていない」は使いやすい。

ただし、例えば、(9) の場合、「日本語を知る」ということを「日本語を習得する」という意味で考えないで、「日本語という言語の存在を知る」という意味で捉えると「知った」も「知っていない」も使えるようになるであろう。しかし、この意味で考えると、今度は、「知っている」が使えなくなる。その言語の存在を認識しただけでは「知っている」は使えない。ある程度、時間をかけてその言語を習得して初めてその言語を「知っている」と言えるようになる。したがって、(9) の「知る」

は、「習得する」という意味で考える。ただ、「存在を認識する」という意味で捉えると「知っていない」が使えるということは、久野・増永(1983)における上記の一般化の例証になる。つまり、「日本語という言語の存在」は、「箇条書きにして伝達し得る種類の知識」と捉えることができるので、「知っていない」が使える、と言えるからである。

以下では、「日本語を知る」と「事件の真相を知る」を代表例とし、「知る」は、 μ^1 タイプであるか、それとも、 μ^0 タイプであるか、また、瞬間動詞の継続化は起こるかどうかということを考えてみる。

まず、「知り始める」という言葉の分布を考えてみると、

(35) a. 彼は日本語を知り始めてからもう 30 年になる。

b. ?彼はその事件の真相を知り始めてからもう 30 年になる。

というように目的語によって、「知り始める」が使い得るかどうか変わってくる。

また、「知り続ける」に関しては、

(36) a. ?彼は日本語を知り続けてもう 30 年になる。

b. ?彼はその事件の真相を知り続けてもう 30 年になる。

というように、「知り続ける」は使いにくいと考えられる。

さらに、瞬間動詞の継続化に関しては、

(37) a. *彼は(少しずつ/徐々に)日本語を知っている。

b. *彼は(少しずつ/徐々に)その事件の真相を知っている。

となり、瞬間動詞の継続化は起こっていないように見える。

しかし、前述したように、直観的には、「事件の真相を知る」ことは短い時間でできるが、「日本語を知る」ことは短い時間ではできない。つまり、前者の場合、開始時と終了時は同一であると考えられるが、後者の場合、開始時と終了時は同一であるとは考えられず、二つの時間の間にはある程度の時間の幅があると考えられる。

(33) と (34) の例でも、非文か否かは別にして、(33) の「知る」は開始時と終了時が同一でない場合、(34) の「知る」は開始時と終了時が同一である場合であると考えられる。

したがって、「日本語を知る」という形式の時、瞬間動詞の継続化は起こっていないように見えるが、実際には起こっていて、何らかの別の原因で進行中のテイル形が使えなくなっているという可能性も考えられる。

ここで、(35a) をもう一度見てみる。瞬間動詞に「始める」が付加された例を再掲する。

(38) (= (23))

- a. この店が開き始めたのは三年前だ。
- b. この缶詰が腐り始めたのは三年前だ。
- c.*彼が死に始めたのは三年前だ。

この例は、非文の例は別にして、「店が開いた」瞬間(開始時、及び、終了時)から現在までの時間が三年、「缶詰が腐った」瞬間から現在までの時間が三年であるということを述べている。これらと比べて、(35a) は、そもそも「日本語を知る」の場合は、開始時と終了時が同一ではないので、「日本語を知る」の開始時から現在までの時間が三十年であるということを述べていると考えられる。むしろ、(35a) は、(23) のように瞬間動詞に「始める」が付いた形ではなく、(22a) のように継続動詞に「始める」が付いた形に近いのではないかと考えられる。

したがって、本来瞬間動詞としての「知る」は、「始める」を付加できないのであると考えられる。よって、「知る」は「死ぬ」と同じ r^0 タイプの動詞であるということになる。だが、瞬間動詞の継続化が起こらないと考えられる「死ぬ」という動詞^{*12}とは異なり、「日本語を知る」ためには、明らかにある程度の時間が必要となるので、継続化が生じ、開始時と終了時が同一ではなくなっていると思われる。

ただ、前述のように継続化は生じているが、進行中のテイル形を使用することはできない。この理由については、5.2.2 節で述べる。

ここまでの議論をまとめると、

- 「日本語を知る」タイプの「知る」
 - 開始時と終了時は同一ではない。
 - リセット時は well-defined ではない。(visibility 0)
- 「事件の真相を知る」タイプの「知る」
 - 開始時と終了時が同一である。
 - リセット時は well-defined ではない。(visibility 0)

ということになる。

^{*12} 生物学的に「死ぬ」瞬間は明確になっていると考えられる。したがって、「死ぬ」の開始時と終了時の間の時間は考えにくい。

5.2 「知る」の振舞

本節では、以上の議論を踏まえ、「知る」の各活用形の振舞に付いて述べる。5.2.1 節では、「知った」について、5.2.2 節では、「知っている」について、5.2.3 節では、「知っていない」について、それぞれ順に述べていく。

5.2.1 「知った」

まず、タ形の振舞に関して述べる。タ形は「タ」が付加された動詞の view が言及時よりも前であることを意味していると考えられる。したがって、view の順序対の右側の時間、つまり、basic view の場合は終了時、resultative view の場合はリセット時が言及時よりも前でなければならない。しかし、その言及時よりも前であるべき時間が well-defined でなかった場合はどうなるだろうか。その場合は、タ形は使えないと考えられる。

- (39) a. 彼は隣の部屋でその椅子に座った。
b. 彼は昨日三時間だけその椅子に座った。

実際、(39a) は basic view、(39b) は resultative view であると考えられるが、どちらも「座る」という語彙の性質により、view の右側の時間は明確に定義されている。したがって、タ形を使うことができると考えられる。

しかし、これを「腐る」という動詞で考えるとどうだろうか。「腐る」という動詞は、リセット時が well-defined ではない。

- (40) a. このバナナは隣の部屋で腐った。
b.*このバナナは昨日三時間だけ腐った。

同じように、(40a) は basic view、(40b) は resultative view であると考えられるが、(40b) は非文になる。これは、resultative view の右側の時間、つまりリセット時は well-defined ではないことが、その理由であると考えられる。

以上のことに関して、「知る」で考えるとどうだろうか。まず、継続化していない「知る」だと、上記の「腐る」の例と同じように振舞うと考えられる。

- (41) a. 彼はこの事件の真相を知った。
b.*彼は昨日三時間だけこの事件の真相を知った。

しかし、継続化した「知る」になると状況が変わってくる。

(42) a.*彼はその時初めて日本語を知った。

b.*彼は昨日三時間だけ日本語を知った。

それぞれ (42a) は継続化した「知る」の basic view、(42b) はその resultative view であると考えられる。basic view でも resultative view でもタ形が使えないということは、この場合の「知る」は、終了時もしリセット時も well-defined ではないということを表しているのである。

直観的にも、「日本語を知る」場合の終了時ははっきりしていないと考えられる。

「真相を知る」の場合、その知識は短時間に伝達し得るものであって、瞬間的にその知識を得ることができると考えられる。したがって、終了時 (実際は開始時と同一) は、はっきり定まっているといえる。しかし、それに対して「日本語を知る」の場合は、ある程度まで日本語の知識を習得すれば、「日本語を知っている」という状態になることができるが、どの程度まで習得すればそのような状態になり得るのかははっきりしていない。よって、この場合、終了時は well-defined ではないということが分かる。さらに、その well-defined ではない終了時が過ぎた後、いつ「知っている」状態が終わるか、つまり、いつリセット時になるかはわからない。したがって、リセット時も well-defined ではないと考えられるだろう。

では、開始時が定義されていて、終了時とリセット時が well-defined ではないということは、「待つ」のような indefinite activity と同じようなものであると考えられるのだろうか。そうではない。「待つ」は開始時が定義されていて、終了時とリセット時は well-defined ではない。したがって、「待つ」には resultative view がない。そのため、「待つ」には、進行中のテイル形の用法はあるが、結果状態のテイル形の用法はない。それに対して、「日本語を知る」には結果状態のテイル形がある。よって、「日本語を知る」には resultative view がなければならない。したがって、終了時とリセット時が同一であると考えられる「待つ」とは異なり、「日本語を知る」の場合、終了時とリセット時がともに well-defined ではないが、両時点は異なっていると考えられる。

以上まとめると、「日本語を知る」の場合、終了時とリセット時が well-defined ではなく、しかも、異なっているというようになると考えられる。

以上のことをまとめると

- 「日本語を知る」タイプの「知る」の $\text{temp}:\langle s^3, f^1, r^0 \rangle$
- 「事件の真相を知る」タイプの「知る」の $\text{temp}:\langle s^3, s^2, r^0 \rangle$

ということになる。

これを便宜的に図示すると「日本語を知る」タイプは、図 5 のように、「事件の真相を知る」タイプは、図 6 のようになる。

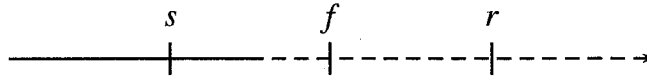


図 5: 継続化した「知る」

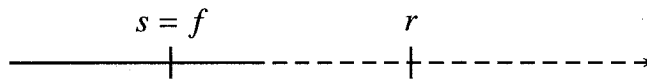


図 6: 瞬間動詞としての「知る」

5.2.2 「知っている」

前述したように、「日本語を知る」の場合、瞬間動詞の継続化のように終了時とリセット時が同一ではなくなると考えられる。しかし、(37) で挙げたように進行中のテイル形の意味でのテイル形は使われない。

ここで、テイル形の規則を思い起こすと、元の動詞の **temp** を $\langle s, f, r \rangle$ とするとテイル形の **view** は、進行中のテイル形の場合 s と f の間、結果状態のテイル形の場合 sf と r の間にあることになる。つまり、テイル形の **view** を $\langle \boxed{1}, \boxed{2} \rangle$ とすると、進行中のテイル形の場合は、 $s \leq \boxed{1} \leq \boxed{2} \leq f < r$ という不等式が、結果状態のテイル形の場合は、 $sf \leq \boxed{1} \leq \boxed{2} \leq r$ という不等式が、それぞれ成り立つ。つまり、二つの用法の大きな違いは、 $\boxed{1}$ 、および、 $\boxed{2}$ が、進行中のテイル形の場合は、終了時よりも前にあり ($\boxed{1} \leq \boxed{2} \leq f$)、結果状態のテイル形の場合は、終了時よりも後にある ($f \leq \boxed{1} \leq \boxed{2}$)、ということである。ただし、5.2.1 節で述べたように、継続化した「日本語を知る」タイプの「知る」では、終了時がどこにあるかは

はっきりしていない。つまり、終了時は well-defined ではない。したがって、終了時がどこにあるか分からない以上、**[1]**、および、**[2]** が、進行中のテイル形のように終了時よりも時間的に前であるか、それとも、結果状態のテイル形のように時間的に後ろであるかという違いは、余り大きな違いではなくなる。つまり、進行中のテイル形も結果状態のテイル形も、ともに、**[1]**、および、**[2]** が開始時よりも後であるということが重要になってくる。この場合、進行中のテイル形も結果状態のテイル形も意味としては大きな違いはないのである。このため、継続化した「知る」には、進行中のテイル形の用法がなく、本来、継続化する前からある、結果状態のテイル形の用法のみが使われるのである。

したがって、瞬間動詞の「知る」も継続化された「知る」も resultative view に「ている」が付加されたテイル形であると考えられる。

継続化された「知る」の **temp** は $\langle s, f, r \rangle$ であり、resultative view の **view** の素性は、 $\langle sf, r \rangle$ となる。ここで、resultative view の **temp** の sf の visibility は 3.1 節で述べたように、 s と f の visibility の低い方になる。したがって、 f も r が well-defined ではないこの場合、**view** の左側の時点も右側の時点も well-defined ではなくなる。

この resultative view の visibility は「似る」、「たonyよう」などのように indefinite achievement の resultative view の visibility と同じである。indefinite achievement は金田一の分類の第四種に対応する。

したがって、2.1 節で述べた、久野・増永 (1983) における『「日本語を知っている」が「鼻がとがっている」のような単純状態に近い性格を持っている』という指摘はもっとものことであろう。

5.2.3 「知っていない」

結果状態のテイル形の否定は、タ形の存在が重要になる。結果状態のテイル形の否定が、その答えになるような疑問文はどのようなものであるか考えてみる。本節では、「知っていない」について考える前に、まず、一般的な瞬間動詞である「座る」について考察する。

- (43) a. 君はこの椅子に座りましたか。
b. —いいえ、座りませんでした。
c. —いいえ、座っていません。

この例は、(43a) のタ形の疑問文に対して、(43b) ではタ形の否定で、(43c) ではテイル形の否定でそれぞれ答えている。当然、文脈によっても変わってくるが、ど

ちらの答えも普通にあり得る。しかし、それぞれの答えは、少し意味が異なっている。

(44) a. 君は一時間前にこの椅子に座りましたか。

b. —いいえ、座りませんでした。

c. —いいえ、座っていません。

(45) a. 君はもうこの椅子に座りましたか。

b. —?いいえ、座りませんでした。

c. —いいえ、座っていません。

ここで、それぞれ答となる文が何を否定しているか考えてみる。

(44) と (45) を見てみると、まず、(44a) の疑問文は「一時間前に」この椅子に座ったか否かを問題にしている。したがって、(44b) と (44c) は、微妙なニュアンスの違いはあるとしても、それぞれ、「座る」の view が一時間前の時点であるということをも否定していると考えられる。

それに対して (45a) は現在よりも前に「座る」の終了時が存在するか否かを問題にしている。この場合、(45b) はいくらか不自然に感じられる。そして、(45c) は過去に「座る」の終了時があったことを否定していると考えられる。

まず、タ形は過去を表すと考えられるので、「座る」の basic view を $\langle s, s \rangle$ とすると、単純に「座った」という場合、この時点 s が現在よりも時間的に前であると言える。さらに、(44a) がそうであるが、「一時間前」のようにその時点 s がいつであるか明記されている場合がある。(45a) ではそれは明記されていない。したがって、タ形は、その意味として、

- 過去のある時点が存在して、
- その時点で元の動詞が成り立つ。

ということを含んでいると考えられる。

また、「座っている」という結果状態のテイル形を考えてみる。このテイル形の view を $\langle \boxed{1}, \boxed{2} \rangle$ とすると、 $s \leq \boxed{1} \leq \boxed{2}$ という関係が成り立つ。この関係は、「座っている」が成り立つ時点が現在だとすると、「座る」が成り立つのは過去の時点であることになる。しかし、過去のある時点で「座る」が成り立つということは「座った」に関しても成り立つことである。それでも、「座った」と「座っている」は表している意味が異なっている。これら二つの違いがどこにあるかというと、「座った」は過去の時点に注目していて、それに対して、「座っている」は現在に

注目していて、「座る」が成り立ったのは現在よりも前であるということしか意味していない。現在よりも前のどの時点であるかということには、注目していない。

つまり、元の動詞の開始時を s 、現在を x_0 とすると、タ形も結果状態のテイル形も、 $s \leq x_0$ という条件が成り立つ。その上で、この二つの形式の相違点としては、タ形は s の時点に、結果状態のテイル形は $s \leq x_0$ であることに、それぞれ注目しているという点が挙げられると考えられる。

まとめると、

- 「座った」は、過去のある時点が存在して、その時点で「座る」が成り立つことを意味する。
- 「座っている」は、「座る」が成り立つのは過去であることを意味する。

ということになる。

この違いが、「座った」の否定である「座らなかった」と「座っている」の否定である「座っていない」の違いにどう関わっているだろうか。まず、「座らなかった」は、過去の時点に注目している「座った」の否定であるので、そのある過去の時点で「座る」が成り立つことが否定される。それに対して、「座っていない」は、「座る」が成り立つのは過去であるということに注目している「座っている」の否定であるので、「座る」が成り立つのは過去ではない、という意味になる。

つまり、

- 「座らなかった」は、過去のある時点が存在して、その時点で「座る」が成り立つことを否定している。
- 「座っていない」は、「座る」が成り立つのが過去であることを否定している。

と考えられる^{*13}。

このように考えると、(45a) に対応する (45b) は、(44a) に対応する (44b) とは異なり、「一時間前に」のように疑問文で明記されている時点がないので、当然それを否定することができない。そのため、過去のある時点に注目している「座らなかった」が使いにくくなっていると説明できる。

瞬間動詞としての「知る」に関しても上の「座る」に対するものと同じ議論が成り立つと考えられる。しかし、5.2.1 節で述べたように、継続化している「知る」の

^{*13} 形式的には、「座る」が成り立つ時点の集合を $\llbracket \text{座る} \rrbracket$ とすると、

(v) a. 「座らなかった」 $\Rightarrow \exists x < x_0 (x \notin \llbracket \text{座る} \rrbracket)$
b. 「座っていない」 $\Rightarrow \neg \exists x < x_0 (x \in \llbracket \text{座る} \rrbracket)$

なると考えられる。

場合は、開始時はともかく、終了時は well-defined ではない。したがって、5.2.2 節で述べたように、継続化している「知る」の resultative view は、その左側の時点も右側の時点も well-defined ではない。上の議論で、「座っていない」は、過去に「座る」が成り立つことを否定する、ということを述べた。しかし、継続化している「知る」の resultative view は両方の時点が well-defined でなく、どこにあるかはっきり分らない。このため、「知っていない」は、否定すべきことである、『過去に「知る」が成り立つ』ということが成り立つかどうか定めることができないので、使えなくなると考えられる。

(46) a.*君は日本語をもう知りましたか。

b. —*いいえ、知っていません。

以上が「日本語を知る」の場合、「知っていない」が使えない理由である。5.2.1 節で、「知った」が使えない理由として終了時とリセット時が well-defined ではないことを挙げたが、このことは「知っていない」が使えない理由でもある。このため、「日本語を知る」のように「知った」が使えない場合、同時に「知っていない」が使えなくなるのである。

6 まとめ

以上、本論では、Igarashi and Gunji (1998) における議論を元に、「知る」の振舞について説明することを試みた。

「継続化」という概念を導入した上で、結論としては、「知る」という動詞には、目的語によって、

- 瞬間動詞としての「知る」
- 継続化した「知る」

の二種類があり、さらに、二番目の継続化した「知る」に関しては、開始時のみが定義されていて、終了時とリセット時が well-defined でなく、かつ、終了時とリセット時が同一ではないという性質を持っているとした。この性質に基づくと、後者の「知る」の場合、「知った」、および、「知っていない」が使えなくなり、「事件の真相を知る」の場合は、「知った」も「知っていない」も使えるのに対して、「日本語を知る」の場合は、「知った」も「知っていない」も使えなくなるという「知る」の振舞が生じてくることを見てきた。

ただし、まだ、形式的な議論は整備できていない。これは今後の課題と考えている。

参考文献

- Igarashi, Y. and Gunji, T. (1998). The Temporal System in Japanese. In T. Gunji and K. Hasida (Eds.), *Topics in Constraint-Based Grammar of Japanese*, Vol. 68 of *Studies in Linguistics and Philosophy*, chap. 4, pp. 81–97. Kluwer Academic Publishers.
- 川本 茂雄・國廣 哲彌・林 大 (編) (1979). 『意味・語彙 (「日本の言語学」第5巻)』. 大修館書店.
- 金田一 春彦 (1950). 「國語動詞の一分類」. 『言語研究』, **15**. (川本・國廣・林 (1979, pp.295-318) に収録。).
- 金田一 春彦 (1955). 「日本語動詞のテンスとアスペクト」. 『名古屋大学文学部研究論集』, **X** (文学 4). (金田一 (1976, pp.27-61) に収録。).
- 金田一 春彦 (編) (1976). 『日本語動詞のアスペクト』. むぎ書房.
- 久野 暲・増永 喜代子 (1983). 「「知ラナイ」と「知ッテイナイ」」. 『新日本文法研究』, 7 章, pp. 109–116. 大修館書店.
- 益岡 隆志・田窪 行則 (1992). 『基礎日本語文法 —改訂版—』. くろしお出版.
- Sag, I. A. and Wasow, T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*, Vol. 92 of *CSLI Lecture Notes*. Stanford, California: CSLI Publications.
- 砂川 有里子 (1986). 『する・した・している』, 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ (寺村 秀夫 企画・編集)』, 2 巻. くろしお出版.

A behavior of instantaneous verb “shiru”

OHURA, Makoto

Abstract

In Japanese, the instantaneous verb “shiru” (which means “know”) behaves differently from another verb morphologically. Normal Japanese verbs such as “yomu” (in English “read”) conjugates like “yomdeiru” in negative progressive form. But instead of negative progressive form “shitteinai”, the form “shiranai” which is a normal negative form is usually used.

The form “shiranai” is not always used for negative progressive form “shitteinai”, however. According to syntactical or semantical circumstances, negative progressive form “shitteinai” is used.

In this paper, I analyze the Japanese instantaneous verbs from the angle of three temporal points which all verbs have, start time, finish time and reset time, first. Especially, I introduce the phenomenon that an instantaneous verb behaves like a continuance verb. This is termed “continuanizing of an instantaneous verb”. Second, I describe the behavior of the instantaneous verb “shiru” and analyze this on the supposition that “shiru” has two sort of lexicons, one of which is a normal lexicon and another of which is a “continuanized” lexicon. Finally, on the assumption that “shitteinai” is able to be used, I explain why this form can’t use in the particular environment.